

次第

1 開会

2 検討会議

検討項目（前回の検討を受けて）

ア 諸計画等との位置付け整理

イ 基本理念

ウ 整備の基本方針

エ 施設の役割と機能

3 その他

連絡事項等

会議の概要

*（仮称）柿田川ビジターセンターについて本文中では「VC」と表記する。

委員長

・本業務の受託事業者について説明

⇒株式会社乃村工藝社

・傍聴希望者についての説明

⇒委員長に一任し傍聴を許可

委員

①議事録の公開について質疑

②HPでの公開についての要求

③保護等追加意見について

事務局

①情報公開請求で公開している旨回答

②HPの公開についても委員の承諾を得たため公開

委員長

③本日の会議で再度発言願う。

検討事項

構想案資料を基に説明

○今回の事業を取り巻く上位計画や関連計画

- ・ 第4次清水町総合計画
- ・ 清水町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン・総合戦略
- ・ 第2次清水町都市計画マスタープラン
- ・ 柿田川周辺地区まちづくり（水の駅）構想
- ・ 伊豆半島ジオパーク構想

○基本理念の整理

- ・ 「柿田川を未来へ」「学ぶ」「交流する」「発信する」を基本理念
- ・ 柿田川は清水町の魅力を物語る地域固有の資源であるとともに、日本を代表する湧水の一つで未来に継承すべき宝だと捉えている。
- ・ 現状、清水町民、近隣地域住民からの親しみが、かつてに比べると、低い傾向にある。
- ・ 多くの方に知っていただけるような、せつかくの価値ある地域資源が共有されていない状態にあると捉えた。
- ・ こうした状態に対し、より多くの人々と柿田川の接点を増やしていく。地域資源の理解を深めて、未来に向けて保全意識の啓発をつくっていく取り組みが期待されている状況にある。
- ・ 人々の関心を導く方法として、「気づく→学ぶ→行動する」といった、価値に気づき、その価値の内容を学び、価値を保全していく行動につなげるという、自律的な学び、行動につながっていく拠点が必要と考える。
- ・ 柿田川を未来につなぐための、清水町内外の人々の交流を育む、地域固有の魅力への愛着と共感を広げる、環境保護・保全学習＋交流拠点として柿田川ビジターセンターの整備を進めていきたい。

○基本方針の説明

- ・ 柿田川の価値を共有し、清水町への誇りと愛着を育む施設
- ・ 憩いと交流を育み、清水町のにぎわいを生み出す
- ・ 清水町のシティブランドの確立と、町への再訪を促す場

○VCの機能

- ・ 学習・体験機能
- ・ 保護・保全機能
- ・ 発信機能

- ・休憩・交流機能
- ・連携・案内機能

○展示の基本的な考え方

- ・柿田川の価値が分かりやすく、人のつながりを大切にする展示内容
- ・多様な利用者の方が使える、多様な利用者の用途に対応できる、学習・交流効果の高い展示
- ・展示の連携
 - ・湧水の道、柿田川公園への回遊を促す。
 - ・町の図書館、地域交流センターを中心とした清水町内の関連拠点との連携
 - ・沼津、三島等の近隣や山梨県も含む富士山関連拠点と連携

○展示構成

- ・柿田川の魅力に気づく
 - ・柿田川が何なのかに気づく
- ・小さな大自然・柿田川に学ぶ
 - ・富士山頂に降った雨が届いているという側面。生物多様性の側面
- ・柿田川を未来へつなげる。
- ・柿田川と共生する。
 - ・柿田川と一緒に暮らしているライフスタイルの紹介
 - ・柿田川の保護・保全への取り組み
- ・ふれあいゾーン
 - ・屋外と接するような場所
 - ・エコキッズめばえ広場

○施設の機能をイメージスケッチで紹介

- ・絵にすることで、想像しやすくなる。
- ・実際にこの展示をやるわけではない。

質疑等

委員

- ①「日本一短い一級河川柿田川」の表記について再確認願いたい。
- ②泉頭城の堀“へ”の表記について確認を願いたい。(柿田川の水を引いていない。)

事務局

- ①確認をとります。
- ②泉頭城の堀“へ”の利用の歴史というのは、(この場所が)堀にも使われていたというこ

と。表記の仕方はもう一度確認

委員

委員提案書類について説明

①キャッチフレーズの追加

- ・一般の会社にもキャッチフレーズがあり思いが伝わる。

②1,000 m²のイメージのために商工会（会館）を見学してはどうか？

- ・1,000 m²は思っているよりも広くない。
- ・イメージイラストの内容を盛り込むとなると手狭

③全てをお膳立てして、さあどうぞというかたち（展示）が果たしていいのかどうか？

- ・来る人、あるいは住民には押し付けみたいに見える。
- ・育てていく施設
- ・使っている人たちが徐々に育てていく施設のありようも、検討の余地があると感じる。

事務局

- ・構想の中でどのように盛り込むかを検討する。
- ・イメージイラストの内容をすべて盛り込むということではない。
- ・1,000 m²のなかで一番効果的な手法を検討したい。

委員

- ・前回検討の中で「感じる水」とか、「飲む天然記念物」があり非常に良い言葉だと感じた。
- ・柿田川らしさは、水の圧倒的な存在感だと思う。
- ・コンセプトの中に、水の存在感を感じるということが、もう少し入っていいと思う。
- ・「学ぶ」よりも「気づく」のほうが、最初のキーコンセプトに入ってくるべき。
 - ・柿田川は目の前にある。VCでこんなにいろいろなものを学ばせる必要があるのか。
 - ・自分たちで気づきなさいというお膳立てができる施設
- ・できるだけ様々な団体が活動しやすく、ワークショップやガイドができやすい準備の場、そのための空間が非常に大事

事務局

- ・事務局では、川に入れられないこと、触れることもできないことから、VCでの展示等で体感するとか、擬似的な表現が必要かと考えた。
- ・今までのご意見では、むしろ、ここでは触りの部分だけを展示等で表現をし、後は実体験（ソフト事業：外来種除去体験等）で感じていただく手法が好ましいとの意見であると捕らえる。

委員

- ・初めから全部教える必要はない。

- ・外来種は何か、在来種は何かぐらい。
- ・外来種がなぜいけないのかは、ソフトの面や、川を見て感じる。
- ・できるだけシンプルなほうがいいと思う。

委員

- ・学習といったことがすごくクローズアップされている。
- ・毎回毎回学習するといっても、1回でいいよみたいな感じになる懸念
- ・来るたびに水を感じて、癒やしを感じて、それを求めて実際に見に行くという流れが非常にいいなと思う。

事務局

- ・伝えたいことを押し付ける展示より、来る人が来やすく、学びたい人が学べばよくて、水を感じ、「気づく」ところを大切にとのことご意見…展示手法については再度検討する。

委員長

- ・委員の意見では、基本コンセプトの「学ぶ」「交流する」「発信する」の「学ぶ」をどう扱うかが大事であるとの意見だと思うが、これについては？

事務局

- ・「学ぶ」「交流する」「発信する」の“「学ぶ」”を、「気づく」、「感じる」等の表現で検討する。

委員

- ・「気づき」だけではなく「学ぶ」の観点も必要である。
- ・気づいても学ばなければ理解できないこともある。
- ・柿田川として学べる工夫は必要

委員

- ・「学ぶ」を、教育の観点から言えば、あえてここでなくても・・・
- ・学校教育、図書館
- ・教育に関しては、連携の中で議論は進めていけばいかがか。
- ・その現場でなければ、気づけないもの、実際に見るもの、伝わるもの・・・その意見には大変同感する。
- ・交流する面でのコンセプトの提案も必要
- ・マルシェの開催
- ・常に変化していく・・・

委員

- ・地元から、柿田川への愛を育んでいきたいというのは1つのコンセプト
- ・学校の利用を見すえた団体スペースの設置は必要

- ・人間にとって、水はどのような価値があるのだろうかというテーマ
 - ・この水によって、相当の人の命が育まれている。
 - ・命の水と言える。
 - ・柿田川の特徴を細かく示す展示よりも、水は人にとって価値があるという気づきの促し。
 - ・普遍的な価値を持つもの。

委員

- ・前回、例えば学びとか、販売とか、観光、交流の場とか、いろいろ盛り込みたいような話があった。
- ・今回提示の基本理念のプランを見ると、どちらかというと町民の憩いの場、学びの場という思いが強い。
- ・子どもたちに、ここを学んでもらいたいとか、地元の思いを持ってもらいたいと、町民の方は強く思われているのかなという印象
- ・長崎では、各名所で市民もボランティアで観光のガイドを行っていた。
 - ・過去にどのような歴史があったのか。
 - ・現在にどのように繋がっているのか。
- ・柿田川の湧水について地元で知っていることを伝えるガイドやポイントがあると親切
- ・せっかくある地元の水辺を利用して、町の子どもたちがそこで学ぶのはいいこと。

事務局

- ・施設のメインテーマについて、「学ぶ」「交流する」「発信する」とした。
 - ・柿田川の価値を高めるためにも「学ぶ」必要がある
 - ・保護・保全というのが当然柿田川の幹になる部分
 - ・柿田川を学ぶために、交流するために…というコンセプトで施設を検討
- ・対象については、基本方針で示した、3つの言葉のそれぞれの下に、子ども、町外に住んでいる若手ファミリー層…というかたちで、若干、対象者の絞り込みをした。
 - ・主な対象者として捉えながら進めていくというような指針として、記載

委員

- ・ビジターセンターというのは、今日の雰囲気よりはよそからの人に目を向けているものではないか。
- ・内側と外側のラインをどこに引くか
 - ・静岡の東部の中でも、三島、沼津、長泉、清水町から伊豆市が内側
- ・外からの流入という意味で、こちらにどうやって入って来てくれるかを重要視したい。
- ・三島にも来てもらって、その足で柿田川も通ってもらって、沼津に行って帰ってもらおう。

- ・内と外のラインを引いたうえで、外からの流入という視点が少ないと感じる。

事務局

- ・外からの（交流客）の目線は少なめになっていると思う。
- ・呼び込むほうを重点的にというのは、出てこない。
- ・1,000 m²程度の建屋でどう入れ込むかは検討する。

委員

- ・「気づき」が大事だというのは、気付くことで終わらせるわけではない。
- ・「学ぶ」の中に気づきがある必要がある
 - ・パネルを展示したり物を見せたりして、「さあ、勉強してください」「覚えてください」というのではない。
 - ・生態系の関係が分かるような展示（ワークショップ）が必要
 - ・「気づく」という言葉が抜けると、個々のものに対してその視点がなくなってしまう。
 - ・レイチェル・カーソンさんが、『センス・オブ・ワンダー』という本の中で、学ぶことは気付くことより重要ではないというようなことを言っていることに近い感覚で、学びの中に気づきの仕掛けがあってほしい。

委員

- ・展示でいうと、場所が限られるので、書いてある全部は難しい
 - ・随時変えていく必要がある。
 - ・つくっておしまいではなく、更新できるような展示
 - ・外での気づきと学びを連携させる必要がある。
 - ・ソフト部分の提供者（ガイド等）を育成していく必要がある。
- ・基本理念の中の「他拠点との連携」という言葉の具体的なイメージがあるのか？

事務局

- ・具体的なイメージない。
 - ・富士山周辺の水に関する施設との連携を想定
 - ・施設間でのコラボレーションできれば面白い。
 - ・山梨の淡水魚水族館で柿田川を紹介している。
 - ・お互いの施設で紹介し合うことよっての相乗効果

事務局から確認

- ①「気づき」とは・・・1回学んでみて、いろいろな知識を積んだ後に現場に出て、ああ、そうかという気づきという感覚なのか？
- ②ガイドの育成方法について

委員

①現場、フィールドでガイドが教えるような場面と、初めの入り口（施設の展示）で、こんな生き物があるんだよという場面が、うまく連携する。

②解説の手法を理論で知ることと、それを実践で積み重ねる。

自分で気付いて、「わあ、面白い」という解説ができれば、いいのではないかと思う。

委員長

・「学ぶ」、「気づく」について…

・庁内での検討では「学習」と「学ぶ」は違う。学習だと、教育で教えられるという雰囲気、学ぶというのは、自ら学ぶというものがあって、学ぶという言葉がいいのではないかという結果になった。

委員

・心づもりとして聞いておきたいが、ターゲットが分からなくなってきた。中と外の割合は、大体どのくらいか。半々くらいか。施設が目指すターゲットとしては、何を想定しているのか？

事務局

・来場者調査は、現在実施している。

・ターゲットを明確に定めていない。ただし、住民の方がいつでも気軽に使えるというところは、念頭に置いている。

委員

- ・柿田川は湧水“群”から成り立っている。
- ・重要なのは柿田川でも柿田川湧水でもない。
- ・湧水“群”であることの認識が不足している。

委員長

・構想のなかでどこかで表現できる箇所で検討をすること。

委員

- ・次回までに、構想の段階でかまわないので、ラフプラン（建物や施設関連についての絵図）が示せないか。
- ・展示の部分とか、交流の部分、学びの部分というのが、イメージが湧きにくい。
- ・ラフなかたちでも、絵姿が見えてくると意見として出やすいと思う。
- ・ラフなたたき台。ゾーニングのイメージ、そういうのがあれば、話もしやすい。

事務局

・ゾーニング程度であれば次回用意する。

終了